

光明大系
辨榮聖者

智慧光
清淨光

不斷光
歡喜光

清
淨
光

如來清淨光明に

我等が塵垢は滌がれて

六根常に清らけく

姿色も自づと潤ほるれ

光明は見えねども觸るゝ

春來れば暖温なる和氣が徐ろに到り新緑萌發しまた蕾の芽生して花開くが如く、如來の光明は眼には見えねども、只如來は實に在すことを信じて一心に念佛して至心不斷なれば漸々に光明に觸るゝことを得。然る時は自然に自己心中に發現し來る靈的氣分は、春の氣候に萌發する芽生の如くに、一種云ふべからざる靈的氣分、有り難いと云はんか歡喜と云はんか、この喚起し來る心を信心喚起と云ふ。故に經に其衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ずとは、斯如來の光明に觸るゝときは人の心が一轉して靈性の生れ來る心理状態を説き給ひしに外ならず。

古人が、秋來ぬと目にはさやかに見へねども風のおとにぞ驚かれぬると詠し如く、如來の光明は眼には見えねども、只如來の大悲を憶念して一心に念佛して心々相續至心不斷なる時は、天地に漲ざる如來の靈的光明は、自己の奥底に伏する心靈に一種の靈的氣分が響きて、秋風の寂寥を感ぜし如くに實感し來るのである。

清 淨 光

一心に彌陀一佛を念じ、自己の一心統一し、また能念所念の、自分の心が彌陀を念じて、彌陀の外に我念なく我念が即ち彌陀にて、彌陀が即ち我心となるやうに、一心一行漸々深く進むに隨つて我心と彌陀と離すことのできぬ心の状態となる。喩へば炭に火が燃うつりし時炭全體が火となり火即ち炭を燃す如くに、我心の闇煩惱の炭も彌陀の光明を念じて念々彌陀に相應する時は煩惱の炭も如來光明の心と化す。これを念佛心と云ふ。然れば即ち一心念佛によつて心が彌陀の光明化する時は、心の體は本一なれども光明に化したる心の相は種々の方面に觀ぜらる。

人の心は本一體なれども四類に分類することができる。感覺と感情と知力と意志とである。感覺とは眼で視、耳に聴き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れて起る處の心の相にて、之を佛教にて眼に色を見わかるを眼識界といひ耳に聲を聽覺するを耳識界といひ鼻にて嗅覺するを鼻識界と名づく、すべて此れ等を五根と云ふ。一體凡夫の心は此五根の爲めに、眼にて嬋娟たる峨眉紅顔を視れば忽ちに執着

の念が生じ、即ち眼の慾耳の慾口腹の慾杯の爲めに惹かれて、此色と聲と香と味と觸との五境に對して六根が常に染さるゝ故に、六境を六塵と云ふは人の五根を通じて心を染汚する故に六塵と云ふ。日々の見聞覺知から心を汚すことは常に斷えぬ。

例へば人の身體は活てをる限りは肉の分泌物が毛孔から分泌するのと亦外から塵埃が附着するのと垢穢が常に身につく故に清き水または溫湯を以て垢を洗濯するの要あり。また衣服にても敢へて能く垢を附着せざるとも自づと衣物に垢がつく故に洗濯して之の垢穢を除きて清潔になれば氣持よくなる。外の垢は感じ易きが故に之が洗濯の必要を感じるけれども、心が常に六塵から染汚さるゝ垢は中々に強くして、またたゞに身體や衣服の垢よりは、人間の最も貴量なる人格の上に及ぼすことなれば、實には最も心の垢を淨めて六根清淨にして人格の光輝を發すべきなれどもそこが凡夫の淺ましきである。顔面や外皮膚の垢つのが他見を憚ることは感じ易きなれども、己が心の垢を自己の本心に對して慚愧の感が少なきは是れ人の心のゆへなり。こゝが凡夫と聖人ととの異なる處なり。

常恒に眼前に在します如來は我等が肉體の面を見給はず我が心が心を照らし給ふ故に、我等は如來の御前に慚ぢまた己が心靈を愧づ。ア、實に我らはあさましき凡夫である。自ら人格を高等に進ません

とはせで、自ら肉欲の奴隷となり六根より六塵の爲汚されてそれに愛溺して自ら清淨高潔の心をたもつこと能はざるは實に野卑である。

されば遺教經に當に五根を制して放逸にして五欲に入らしむること勿れと。五根とは眼耳鼻舌身にて、五欲とは眼に色を視、耳に音を聞き、鼻は香を嗅ぎ、舌は味をしり、身は物に觸る。此の眼や耳より肉の快樂を貪ほるを五欲と名く。平生に慎みて能く五根を守りて能く制裁せよ譬へば牧牛者が杖を執つて之を視して縦まゝに人の苗稼を犯さしめぬやうにせよ。若し此眼の欲を縦にせば唯五欲の將さに涯畔なくして制す可からざるのみでない。一例を擧ぐれば口の飲酒欲の如きは、是酒が始めは少量にても酔ふて愉快を感じるも、刺激に抵抗する性が有る故に、漸々に發達して終には多重に飲まざれば酔はず、段々に昂進して屢々飲酒する時は習慣性と爲りて、必需とて無くてはならぬやうに爲りまた病的となる、而するときは酒の氣がなければ體も持たぬやうに爲る。其の害は身體の機能を毀損して病氣となり、また其の毒を遺傳して子孫の體質を病的にするが如く、遂には如來より稟けし自己の靈性を滅ぼして、再び靈に活き更へるてふ時期を失ふて仕舞ふのはまことになげかはしき次第である。

如來の清淨光は人の五欲の爲めに汚さるゝを救濟する大なる力をもつてをる。

凡夫の習ひとして、五欲の爲めに自己の人格が墮落しまた衛生等にも甚だ害があることを知り乍ら自らの力で之を改正することが出来ぬ。また概くは自暴自棄に爲つて迎も自分で人格の改造ができぬ。自己の靈性の永遠の生命を信せぬ故に、自分を只此動物的生活の方面から計り認めて居るのである。

自己は尊き靈性をもつてをる。清淨光に依つて清められて日日六塵に汚さるゝ六根を清淨にして、自分の此眼に來たり與へられる清き眼であるのに、眼の欲の爲めに惑はされ翠黛の蛾眉等の爲に惑はされて、人格墮落してしまふが如きは汚らはしいことである。

清き光よ我らが眼を淨めてあなたの眼の如くに清くして給へよ。

人格改造の光

人は其人品即ち此形骸の上にはいかに立派なる、例へば在原業平平井權八などと形骸の上から世に

稱せられたるも、其の品性に於て皎潔にして珠の如くに光彩を放つべき人格にあらざれば何んぞ云ふに足らん。實に現代の青壯年の志氣は、明治以來の物質の文明進歩が只物質の方面にのみありて、品性の内的改造するに達しない程であつたために、内部の道德的人格を造る方は外部の進歩發達には比較にならぬほど劣つてをる。

如來光明獲得まうくわうの目的は自己の人格を改造する處にあり。

人類は他の動物と異にして、必ずミオヤの光明によりて自己を覺醒して、あるべきやうに自己を指導し改造して光明の中に生活すべきものである。否な光明の中に入るが故に人格が一轉するのである。

他の動物は本能的に眼の欲耳の欲また色食の欲でも本能的で、換へて言はゞ天から與へられただけを正直に守りて、食物でも飢うれば食ふて飽けば止めて敢て人間のやうに貪らぬ。また生殖の本能にても春期が至ればたとひ狂ひ争つて色欲を逞しうせんとするも其期過ぐれば其欲も止む。人間は天の特寵を得るとも云はんか自由を得るが如きまた智慧も進み意志も自由にすべての心の作用が發達してをるだけに、自から能くあるべきやうを覺りて色食の欲にしても清淨に自ら分を守り節を保ちて清淨

にせざれば天賦の體質を傷ひやゝもすれば生命をもちよむるに至る。

自己の身體及び五根及び一切の生理機能、即ち口腹の欲を恣にする爲めに胃腸を傷ひ消化器を害する。そのやうなことをせぬやうに、自ら能く覺りて清淨にせよ。一切の食物は生命を養ひ、自己に賦與せられたる天職を全うする爲めに與へられたる身體及び一切の機能を完全に、而して此世に出たる天分に叶ふやう、力の有限り努力して清淨自活してミオヤに報ひ奉るべき使命に用いる身を、只美味を貪り酒に耽りて飽くことをしらず、闇黒の中に沈淪して不淨不潔の身となり、病を求め命を縮むる如きは、實にミオヤに對する仇といふ外なし。人類にはその爲めに理性と云う智慧を以て、生理上の智も道德上の智も、能く明らかに識らるゝやうに智の作用を賦與せられをるにも拘らず、只其のミオヤの使命を果すべく人格を高尙に殊勝に進ません爲めに與へられたる智慧を還つて悪用して只智慧を以て動物欲の本能を逞うせんとするが如きはミオヤの聖意に叶ふ筈がない。

清白皎潔に生活せよ、是れ清淨光裡の生活である。

人は改造すべき精神的生物

犬馬の如き動物は本能的にして、自己の本能のまゝに發達してゆけば犬は犬の本能の働きの馬は馬の本能あり、人間も動物であるから一方より見れば動物的本能の性をもつてをる事は異らざれども、食物にしても料理して食ふ如く、之を消化する機能に於ても人間的に習慣性を爲してをる故他の動物と同じからず。人間は生れたまゝの本能ばかりでなく終には理性の如く學修によりて修業の結果として高等なる知識の働きを爲す。他の動物には理性が發達して居らぬ故に人間の如くに學業を以て知識を磨く必要がない。人類は動物と異にして學業を以て修練せねばならぬ理性を以てをる。

例へば鑛物の類にしても素朴なる石の如きは天然に自分にもてる朴質のままに選つて風致に見るべきであり、朴石を琢磨するも光を放つべき性なきのみならず却つて天然の風致を破壊して了ふ。然るに高等なる寶石や珠玉に至つては充分に琢磨して始めて其の有せる最も貴重なる性質を發揮して光輝燦爛として光を放つ如く、人類の頭腦に潛伏せる寶石は之を琢磨して實に尊重なる本性の光が發揮

す。人は唯教育を以て理性の知識を研ぐべき斗りにあらずして、其の奥底に有せる靈性は人類の頭上の王室にして之を開發し其の靈性の光を發揮して始めて人に萬物の靈長の徳性が顯はるゝなり。

天より賦せられて人の頭上の玉座に嚴臨すべき靈性は是を佛教で佛性(びつじやう)と名づく。人は佛性を開きてこの光を以て自己の動物性を自から制裁し指導して光明の大道を如實に行爲すべきである。

光明の要と能

光明の要……染汚——苦惱——無明——罪惡

光明の能……清淨——歡喜——智慧——不斷

清淨……厭穢欣淨——感覺——濟美

歡喜……拔苦與樂——感情——人生幸福

智慧……轉迷開悟——知力——人生自覺

不斷……廢惡進善——意志——人格完成

現在を通して永遠にまで

清 淨 光

清淨光歡喜光智慧光不斷光の四光明は個々の心機に直接に感應して感覺感情知力意志の適せざるところの素質を脱却して、關係的に佛意と相應し融合し靈化する機能を有する光なり。

一切衆生即ち個々の心性は其根底に至つては悉く皆な本體の法身にあらざるはなし。故に自心本清淨にして萬德恒沙の聖徳を顯現すべき性能は本自ら豫備せざるものなし。然れども心理に必然的に惡素質の覆ふ處あつて是を顯現する能はず。

靈光は此自性清淨を顯はすべき功能あり。自性とは彌陀の法身の分個、彌陀の光によつて彌陀法身より賦與せられたる自性清淨を顯示す。

清淨光は衆生心理の感覺に與る光なり。此光によりて自己の感覺性の眞面目を發見するを得。感性とは眼耳鼻舌身意の六根なり。衆生は此六識の眞面目を認識せず、顛倒して本來の自性を他の外物と

認めて、反つて他の六塵の妄想分別の影像を自己の心と想像し、外界の誘惑によりて其心象を染汚して、六塵の染垢襲ひて其感性を眩惑し、終に自己の眞面目を遺失し忘却するに至る。哀むべきにあらずや。

感性の眞面目、自性清淨、彌陀法身の賦與とはいかなる體なりや。

賦與の心性とは、心體の包容せる十方微塵の刹土皆我心性に攝して周からずと云ふことなし。虚空なを心中に在り。十方豈に心性の外に存せんや。楞嚴經に曰く「色身より外山河虚空大地にいたるまで咸是妙明真心の中の物なり」と。又曰く「當に知るべし。虚空も汝が心内に生ず。猶し片雲の太清裏に點ずるが如し。況や諸の世界の虚空裡に在るものに於てをや。又云く「空の大覺の中に生ずること海に一漚の發するが如く有漏微塵の國皆な空に依つて生ずる處の……」心性の量斯の如く廣大なるのみならず、其性質は明鏡の如くに極めて清淨なる交徹靈明の虚靈性なり。見聞覺知萬象徹照して大千圓かに一視すべき性能なり。

妙宗疏に「然るに若し心性塵刹を具せずんば則ち佛に應現の理なく、生に咸見の功なからん。」個々斯の如きの心性は本自彌陀法身より賦與せられたり。

三昧發得(三昧)し、此清淨光に依て自己の法身を發覺することを得。心性未だ清耀靈に徹照せず、起行によりて心機開展して、清淨光を得る時、心眼即開して大心海中の萬象を見ること、金烏已に東に昇るときは炳然として萬物を視ることを得るが如し。

此感性を鏡に比せば天然は玉璞にして心機發展せしは琢磨したる寶珠の晃曜焜耀として表裏に暘發するが如し。

一たび心機開展して清淨光を得ば感性究めて交徹清淨光明態となるが故に六根清淨なるを得。

自ら一心に念佛して自己の心性彌陀の大海の一波たるをしり、心の波浪止むとき、この感性清淨にして彌陀の大圓鏡の外に我あることなし。

此光を被りてよりは見聞覺知として眞覺ならざるはなし。色聲香味觸として清淨法ならざるはなし。此光に對せば萬象徹照して大千界を一視す。一心念佛して清淨光と相應する時は六根清淨の功德を得。

六根清淨とは感性清淨なり。此清淨光態の感性には、空間には四方に圓照し、時間としては三際に徹して一時一念に十方三世を照す光なるが故に、此光は感覺的に阿彌陀佛を見たてまつるなり。此中

の一切の萬象は肉眼を開かずして清淨なる感性に十方廓然として萬象逃るゝこと莫く、三千圓に照す。青霄に目を舉げて視よ、清虛に無數の星界は悉く是眼裏の塵なるを。

一心に念佛し清淨光に感性を清淨にして見よ。自己の眞面目顯はれて大千の一切の衆物は歷然せざるはなし。彌陀より賦與せられたる此感性尙不思議、且らく日月太虛の遠き其幾萬億里たるを知らざるべし目を舉て直に視るに非ずや。意の緣ずる所、其の疾く之を俯し仰ぐ間に再び四海の外を撫するに非ずや。天然已に然り。況や精練せる感性に於てをや。

感性清淨なる時は十方の大千悉く眼識に交徹し圓照す。耳鼻舌身も理亦復然り。法華に、清淨身を得れば淨瑠璃の如く衆生喜び見るが如し。其身清きが故に大千界萬象も悉く其中に映現すること淨瑠璃珠に萬物を現すが如しと。楞嚴に浮塵幻化虛妄なるを相と稱し、この妙覺明體、常自瑩然として十方を含吐し、業に循て發現す。故に是體を得るものは現ぜざる處なしと。

阿難と大衆とが佛の開示を蒙りて、身も心も蓋然として罣碍するものなく、各々自ら知る、心性は十方空間に徧して萬有を含容するを。反て父母所生の身を觀ること大虛の一塵か或は巨海の一漚の起滅従う所なく、了然として礙られざるが如し。

此理を證し清淨光を得る時、十方法界洞然として清淨なり。此時心を舉て彌陀の清淨法身妙色莊嚴を感ずるとき明鏡を執つて自ら面像を見るが如し。大經に無量壽佛大光明を放ちて普く一切の諸佛世界を照したまふ。一切の萬物沈没して混濁として大火を見るが如し。彼の佛の光明も亦また是の如し。相好照耀せずと云ふことなし。また無量壽佛の大音はあらゆる世界に宣布して衆生を化したまへるを聞たてまつる。無量壽佛を見たてまつるに威德巍巍として山王の如く高く一切の諸々の世界の上に出で相好光明照耀せずといふことなし。

阿彌陀經に阿彌陀佛今現に在して說法したまふ。また阿彌陀佛もろくの聖衆と共に現に其前に在ます。

此光に應ぜる感性は清淨なること磨きたる明鏡の如く表裏に暢發す。よく鍛鍊せる鐵が利刀となるが如し。琢磨せる珠玉の如く瑩光晃耀明淨なること日月の如し。蓮華の如く六塵に染汚せられず。清虛の如く無限なり。

如來の恩寵と人の信仰

宗教關係は、本より人の精神のみに於て成るべきに非ず。一大事因縁を以て、衆生をして佛知見を開示して佛の正道に悟入せしむるなり。

不識的宗教衝動の曖昧なる冀望の中に、客體如來を愛し、感情の之に對する愛慕は子の親に對する如く、知力は客體を印象し、感情には之を我がものとし、情操至心に宗教的衝動に自ら得んとする客體は、不識的に關係を得るを仰いで信じ、信が崇きに憧憬するをまた之を印し、感情は之に對し憧憬欽仰し、知力は之を印する時は、情は之を我宗〇て、而して宗教的世界の内容を含み、自己の中心を如來の中に立て、如來に對する情操より靈的衝動として、活動の原動力となり、意志は靈的生活の結果として、益々向上發達して、其指導の下に活動し、向上には如來の中に客觀的に行動す。

斯く心の三能を致一したるを一心と云ふ。一心を如來の靈應に對するを信仰と名づく。

信仰とは如來に歸命信賴し、其の命令に率（したが）ふの謂ひなり。此の宗教的關係を知力にのみ信

仰を見る時は、理性主義にして内容を充しめず、活動の原動力なくなる。

また感情の性にのみ見る時は、内容は充實しぬるも盲動たること保し難し。

又宗教的の深奥の内容は己を客體に投影し、如來は凝然不動ならば、我が信仰と交渉を結ぶなし。宗教は自己一面にあらざり如來と人との關係同一機能の二面なるを要す。此の關係なくば宗教なきのみ。

人の知情意三能を致一したるを信仰として之に交渉すべき如來の四光あり。清淨、歡喜、智慧、不斷の光是なり。この四光は本一體なれば、之を恩寵また聖靈と名づく。如來より人に與ふるの謂なり。恩寵と信仰と合一して宗教關係を實現す。

法華に又如來一大事因縁を以ての故に世に出現す。一大事因縁とは、衆生の信と如來の恩寵の縁との感應に由つて、人の知見を開示し、而して如來の聖道に入らしむるにありと。

因縁とは信仰と恩寵との感應にして、機能致一の不可離の關係なり。此の二面は一面を活動とし、他を受動とすべからず。二者同活動なり。

如來の恩寵が人の機能に在つて活動す。如來の恩寵即ち人の信仰に交感し、水に火を加ふる時、蒸

發して蒸氣力を發すと同じく、此の因縁即ち神人の感應に由つて生活々動す。

宗教理性主義は自己の根底たる絶對主體と致一なるを開發し顯示するも、そのみにしては形式動機のみにして、動かさば澹泊に陥り、内容に缺けたる宗教は活動すべきものに非ず。又理性の方面缺ける時は自己の根底なき。

吾人の理性は本有にして、絶體主體より與へられ、之を開發によりて顯示す。感性は如來の關係によりて啓示し靈化す。また活動せらる。

主體なる一心を活動の四方面に分類し、感覺、感情、知力、意志とす。此四心分類に對する如來の恩寵を、また四面より見て、清淨、歡喜、智慧、不斷とす。次での如く、感覺を美化し、五根清淨にし、心情を融合し、歡喜し靈福を與え、智力正知見を開示し、眞理に悟入せしめ、意志を靈化し、佛智の眼を開きて、如來の正道に行動し、聖子として聖職を果すべき心理状態を、人の方面より見たるものなり。

清淨光と五眼

感覺とは人の五官、所謂、五根五識、眼耳鼻舌身が外界の色聲香味觸の刺戟によりて起す處の心理作用なり。

天然の人の感覺は外界の五境の誘惑によりて五欲に溺れ其の精神を染汚す。故に名づけて五塵と云ふ。たとへ外界に惡の誘惑物充滿すとも、己に煩惱種の潛伏するに非れば動機となるべからず。經に五欲は心を主とす。經には五欲の過患をあげて、其の誘惑を防禦すべき心靈を發展すべきことを教へられたり。凡夫多くは感覺の爲に心靈を染汚す。五欲の感情を根本として、感覺の爲には、感覺的。人の天然なるは實感のみにして美感は未だに展せず。

感覺に佛敎には五眼等の五種の感覺を明せり。

肉眼には生理學的の天然の機能的物理的機械的壓迫を以て五官の作用あり。

生理の自然律に制せられて機械的機能に種々あり。人は光を藉りて視るに動物禽獸の中に光によら

ずして視るあり。日光の爲に碍らるゝあり梟の類の如し。日光に視、燈に視ざるあり鶏の如し。

すべて生理機能器械的なるは肉の五官と名づく。

次に天眼等の修養の結果自然と致一し冥合する時、一大精神界中の自然界なれば、神通感應して、空間的に遠近に拘はらず、碍障なく明晴なく自然界の萬象を見聞するを天眼天耳とす。また天鼻と云ひ、天舌天身と云ふ。

法五官、法は事法性、法性の理性に隨順して事法界をなす。

自然界以上の心靈界即ち如來自境界に顯現せるすべての感覺を見聞するを法眼と云ひ、如來の本質即ち法性に稱(かた)ふ五塵の境界に對する五感作用にて、淨土の五妙境界を見聞覺知する感覺作用即ち感覺心象なり。

法性眞如界涅槃界の莊嚴を感覺する五官なり。淨土の五妙境界は其の感覺する所をあらはせり。

法身に屬せる五官の感覺の故に法眼等と名づく。

美學に所謂美的假象なるもの亦法眼に屬す。三昧境中に法界に逍遙し淨土の莊嚴を感見す。

自然界は肉の五官の感覺界にして心靈界は至美の感覺即ち法の官能の(所感)。

法華の我此土安穩、天人常充滿等はこゝに屬す。

慧眼

五官の體は一大理性にして法界を盡して觀念的理想の一體觀なり。視聽嗅味觸を通じて一體清淨にして心靈界と相應したる。

如來の本質の中たる絶對理性態を感じ、一切差別を絶したる本質實體と相應するなり。彼此の想を絶し理法界を觀する作用なり。

佛眼

前四眼を統一し、四眼は本如來のはたらきが人の機能的に實現したるは肉の五官、人の心靈によりて實現せるは法。

慧眼の一體なると法眼の事々の感性とを統一したる佛眼には、一塵中に十方無量の利海を見る等。また五根互用、圓融無碍等、佛の感覺を云ふ。

宗教の美的儀禮

感覺。

禮拜の崇高に森慄し、懺悔に切齒し、救濟の慈悲に親接し、融合の快味を覺え、慈悲を得たるを信じて、愛情の最高妙樂を享く。感情は刺激の高まるに従ひて感覺分子増進する。

美的感象は精神的にして、淒涼壓迫の空氣に觸れ、立ち上る香煙に精神朦朧とし、五色の窓の中の薄暗き間に宏莊の穹窿を仰ぎ、沈靜の音樂に信仰を震慄し、是等の感覺は崇高の美的感情に伴いて感覺的卑下なし。未だ入神せざる者を攝取する功あり。教會の讚歌が宗教改革の豫備をなせし。

寬印僧正梵唄、妓王、妓女の禮讚、安樂、住蓮。

宗教入神せし人も、尙増進し精微にする爲には感情を練達するを必要とす。其の寫象を昂進するは、其の感情の反動感應によりて刺撃す。宗教的感情は精練熟達するを要し、之を精緻ならしむるは美的儀禮を最好とす。

清 淨 光

宗教的心機即ち感性が、如來の清淨光に感化し、純熟する時は、感性極めて精妙に、瑩然として光を放ち、喩へば玉璞を琢磨し垢質去る時は玲瓏として内外に映徹せるが如し。最も靈妙なる感覺機能八面玲瓏とし、又洞然として十方に徹照し、靈明にして不可思議なることを得ん。喩へば青眼鏡によつて四面を望む時は萬物悉く翠色を呈するが如く、感覺機能にして清淨靈徹なる時は、向ふ處として玲瓏たる美天國と顯現し、耳根清徹にして微妙の聽覺を感じ、嗅覺至妙にして香芬烈なるを感ぜん。客觀界の龕劣穢惡を論ずることなかれ、唯阿彌陀佛の靈能を感じて、心性清淨なる時は、處として極樂ならざるなく、方として淨土ならざるなきに至らん。

法華法師功德品に、六根清淨の功德を明せり。略して之を録せば、若し人行至り功成ずる時には、父母所生の肉眼が清淨なるを得て、世界内外を映徹して見る。また因縁果報の生處を悉く見る。また自然に五眼等の功德備はると。世界内外を無碍に見ゆるは天眼の用なり。衆生の業因縁を見るは法眼

の用なり。其の眼清淨なるは慧眼の用なり。一時に内外即ち感覺と觀念世界とを雙べ照すは佛眼なり。

また天然の感覺界を見るは人天眼、二乗境界觀念界の消極の方面なる空のみと觀ずるは是慧眼、清淨の觀念界依正報を見るは法眼なり、完く佛を見るは即ち佛眼なり。

耳根清淨とは、世界内外を（感覺界の事を）聞くは肉耳なり。觀念界の徧空を聽くは二乗の慧耳、觀念界と感覺界とを雙べ聽くは法耳なり。絶對圓滿に缺くことなきは佛耳なり。また聽いて染著せざるは慧耳なり、また謬らざるは法耳にして、一時に三世十方を圓かに聽くは佛耳と云ふ。

鼻根清淨とは、世界内外を嗅ぐは天鼻、不染不著なるは即ち慧鼻、嗅觀分別するに謬らざるは即ち法鼻、一時に一切を圓かに覺するは佛鼻なり。

舌根清淨とは、一切諸の苦澁の物にも悉く變じて上味となること、天の甘露の如くならんは天舌、眞味は無味なりと味ふは二乗の慧舌、萬法謬らずして味を知るは法舌、圓かに一切の法味を一念に味ふは佛舌なり。又舌根清淨にして深妙の音響を出して聞くものを歡喜悅豫ならしむ、諸の語をなすと自在なるは天舌、壞せざるを慧舌、謬たざるは法舌なり。一時に互に用ひて自然に無碍なるは佛舌

なり。

身根清淨にして淨瑠璃の如く、衆生見んことを樂（ねが）ふ。世界の内外悉く中に於て現前す。世間のあらゆる中に現ずるは肉身の用なり。二乗身中に現ずるは慧身の用なり。菩薩の中にて現ずるは法身の用なり。佛身中に現ずるは佛身の用なり。一時に圓かに現じて一時に互用す。謬りなく著することなし。

心の實相を證する時、四大皆空にして、淨瑠璃の如くに障礙なく、森羅萬象現前せずと云ふことなし。意根清淨にして一偈一句を聞くに無量の義に通達し、其の所説の法其の義趣に隨ひて皆實相と相應す。皆俗間經書世語言、資生の業等を説かんに皆正法に順ず。其の人思惟籌量言説皆是佛法にして眞實ならざるはなし。世間の資生産業皆正法に順ずるは意清淨なり。實相と違背せざるは即ち慧意清淨なり。思惟籌量するは佛意清淨なり。一時に圓明に互用するに誤ることなし。

感覺界は感覺の所現

人仰いで蒼々たる天を瞻、俯しては萬物を睹る。斯くの如きの現象は是何に依りて感覺するや。論に心生ずる時は種々の法生じ、心滅する時は一切の法滅す。蒼々たる天眇々たる萬物山水の美景百種の草花若し人の視覺性なき時は物色何の色か呈せん、聽官性なき時は音響の氣を○○す。香氣にも、若し人の感覺なき時は色塵聲塵は何物ぞ。即ち識る感覺界なるものは人の感覺によつて現象を感ずべきものなりと。

唯識論に一水四見の喩あり。即ち萬法唯識の所感の故に吾人は地球に在つて人間界上に男女の相に紅顔蛾眉の色絲竹管絃の聲に於ける蘭麝の香に於る金殿玉堂の美なるも人の美と感ずる所にも他の動物の感官に歡迎せらるべきものに非ることは、他の動物の感覺と人の感覺とは同じからざることを推して知るべきなり。

一水四見の喩とは物質なる水は同一質なるも之に對する生類の感覺に異りて感ずることは、人は之を水と感ずるも、水中に遊ぶ水族の爲には人の大氣中に在るが如くに感ずべく、若し之を精明に純熟したる神識の梵天の天眼には水を映徹せる瑠璃寶地と見え、また肉慾我慾の結晶たる餓鬼の業識には天人が瑠璃地と感見せる水に接觸すべからざる熱河と感ずる如く、全く此の現象界は唯識の現象にし

て若し人にして感覺作用なかりせば、日の明、火の熱、雷の響も感ずべきなからん。若し人天然の心機を超越して精明に靈化せる感性には七寶莊嚴の靈妙的感覺世界を感見すべし。これ非物質精神態の高等なる感覺界を發現すべし。若し物的感覺の清淨國土を發見せんと欲せば甚だ不可なり。譬へば青眼鏡をもて外界を見る時は萬物悲く青色ならざるはなし。若し彌陀に靈化せる精神にて觀見する時は十方處として清淨國土ならざる處なきを感ぜん。

絶對無限の宇宙の眞面目は、本來清淨本然なり。衆生自ら無明によりて誤つて僞劣の世界を感ず。プラトンの感覺世界と觀念世界とを立て、平凡の人は單に感覺世界のみを見、至人は觀念世界を觀ずと。カントの叡知世界とは此の觀念界に外ならず。

法華に我三界の如くに三界を見ず。又衆生劫盡きて燒盡さるるも、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せりと。

此の中に三界とは感覺世界、衆生は自然の感覺世界のみを見て世界の眞相は是の如しと謂へる假相をもて眞實と誤解せり。牟尼は超感覺なる觀念世界に清淨國土を觀見する。然るに此の叡智觀念世界はまた常寂光土とも名づけて、現象の感覺世界は滅却すべくとも、觀念世界は常自として不動なり。

世間の人は現象の感覺世界を以て全く依止すべき處として依屬するも本來現象界は有爲變轉して常住なるものに非ず。若し此の相待規定の世界を超越して絕對的觀念界に安住する精神には安穩にして常住なり。此の觀念世界なるは平等坦然淡泊なる理想態のみに止らず、七寶莊嚴の微妙の莊嚴瑠璃寶地には内外に映徹し金沙徹水照、玉葉滿枝明、音樂八風宣。

是心作佛、是心是佛、自己の精神にして彌陀の靈化を捨て、單に客觀界に淨土を求むるものは是佛弟子に非るなり。自己の主觀靈化する時は向ふ處として七寶莊嚴ならざるなし。處として黄金世界ならざるなし。是心作佛。若し彌陀によらずして靈化すといふ是處（このことわり）あることなし。一念彌陀を念ずれば一念の佛、念々彌陀を念ずれば念々は佛。彌陀の妙色莊嚴を念ずる時は漸々に感染し同化して竟に妙色莊嚴をもて自己の感性に薰せん。楞嚴に香に薰ずること久しくして器物即ち香を成すが如し。若し妙色薰染すれば感性には向ふ處として淨土ならざるなきを感せん。

人の精神本これ絶待主體の一分子なれば、諸の垢質を脱する時は靈覺玲瓏として顯現せん。喩へば寶石を磨きて光彩瑩然たるが如し。人彌陀の靈光に感染靈化する時は感性清淨にして見聞覺知靈精にして、現象界と同じく觀念の淨土を併觀することを得ん。若し淨土の莊嚴の説を聞いて是方便なりと

談ずるものは、天然素質、自己の垢質の感性によりて處として鈍穢のみを見るが故に然るのみ。唯摩に其心淨きに隨ひて佛土淨しと。

菩薩の行を行ずる時、其心淨きが故に、感ずる處の世界も清かになるなりと曰ひしに、舍利弗が然らば今此の土をして如來の土とせば、此の土の鈍惡なるは、佛の昔菩薩の時行じ給ふ時に不淨なる心が所感として斯く此の土は鈍惡なりしやと問ひ上れば、佛の仰せらるゝに、否、我が今此の土は清淨にして七寶莊嚴せりと我には見ゆると。

清 淨 光

感覺に被る光——感覺性を美化して清淨皎潔ならしむる光。

宗教關係の主體なる個人の心機が己に成熟し靈化したる機能を、心理分類の四種の中に於て、精熟の功果として先驅に微光を感ずるものは感覺なりとす。感覺とは視覺聽覺嗅等感覺作用にして、精神は外界との關係には最も先驅として此の媒介によりて精神は外界の物事を經驗す。然るに今教の感覺

に感ずべき清淨光によりて感性を清淨にし玲瓏ならしむるは客觀界（外界）との關係による感性に非ず。尤も原始的宗教天然教に於ける如く、彼等は天然物素の中に客體を認め、蒼々たる曠天赫々たる太陽は即ち神なりとし、儒教に徳の輕きこと毛の如し、毛は猶倫あり、上天の戴は聲もなし、臭もなし、至れる哉、とは感覺の極にして超感覺に進まんと欲する兆あるも、未だ超越すること能はず。亦進んで超然主義には、此の感覺世界を超えて彼岸に到達するに非ざれば、微妙清淨の靈妙の感覺世界を感ずる能はず。此現象界と彼美天國とは其の性を異にすればなりと。

進化せる斯の教には、淨土莊嚴と此穢土とは客觀界其のものの性質のいかゞを言ふに非ずして、自己主觀即ち心機が天然のみに唯感覺界を感ずると、阿彌の觀念によりて、神的觀念世界を感ずるとの言にして、已に主觀にして靈化するときは感性清淨にし、八面玲瓏として阿彌陀佛去此不遠を感ずることを得ん。庭前の柏樹も七寶行樹と草堂茅屋も宮殿瓊閣と映交し雙照するを得ん。

大乘圓滿の修多羅に示せる微妙至美の莊嚴界は客觀的に求むべきに非ずして、主觀的に求むべきものなり。觀經の所説の淨土の莊嚴は全く客觀界の現象に非ず、主觀即ち靈的觀念の客體現象なり。故に觀經に、若し三昧を得ば彼の國地を見るをう分明にして具さに説くべからず、又佛身の高妙なる八

萬の相好無盡の光明等は具さに説くべからず、但だ憶想して心眼をして見せしむべし等と。

現象界は感覺作用の發現——感覺作用——感覺性美化——感覺性の種類

清淨光功能——感性美化——淨土は美化的感性の現象——清淨光の美化的感性を離れて淨土を求むるの非。

種々の世界觀は各自己の心性に起因す——一水四見の喩——淨土の觀經は宗教的感性の修養——宗教は神秘的美的修養

姿色清淨

我等教祖を範とし、彌陀の靈光に浴して、此の宗教的身器の血行、呼吸、神経系、内的分泌等の調節作用を能く調へ、すべての活動機能を彌陀の靈力に充され、靈的活動の器械運動の調節。

宗教的人類とする時は、個人は法身の分身にて宇宙を縮少せる佛子なり。小宇宙なる個體の身體と精神とは同一體の二現にして肉體と精神とは親密の關係あり。

姿色と血液

精神と姿色との關係に就ては、先づ姿色は血液と關係あり、血液の本源は心臟なるが故に精神と心臟の因縁は深い。精神興奮すれば心臟の鼓動盛になり血管が開張して血液循環迅速となり、精神沈靜すれば貧血して顔色が蒼白となる。劇しき憤怒には心臟破裂するあり。また中樞と心臟の血行につき

て血液が中樞より交感神経により傳達して心臓に至れば心臓收縮して血液減じて青白色となり、中樞より迷走神経により心臓に傳達すれば心臓弛緩して血が多量となり潮紅色を呈す。

姿色清淨は靈的活氣の表現にて、靈に活くる人は肉も元氣よく神色玲瓏たり。靈の水に滌れて活潑血液が潔よく循環す。元來血液は身體の營養の原料を胃腸にて消化したる營養物を吸収して身體組織の各部に配置し、而して呼吸より酸素を吸収して組織に分配し炭素をば排出す。分泌腺に必要な成分を供給し、組織の老廢分を體外に排出す。故に若し血液循環不良なれば身體組織に變動を來たす。血液循環の中心は心臓なり。血液は心臓より動脈管に出て毛細管に循環し、營養分を組織に分配し、腎臓又は皮膚よりは老廢分を排除し、組織の代謝産物を靜脈より心臓に還し肺に入て吸酸除炭の働きを爲して又心臓に還る。此の循環作用は心臓の收縮と擴張との運動による。即ち心臓が擴張すれば靜脈管より血液を受容し心臓が收縮すれば動脈管に送る。此の運動によりて血液循環を調節す。吸氣には肺が擴張し、○壓を生じ心臓及血管は働けども胸廓外の血管は外界の氣壓を受け、胸廓は靜脈血を心臓に吸引して循環を助く。呼氣は靜脈血の環流を助く。而して心臓縮張の秩序の運動は全身末梢の循環を掌ると共に循環を調節す。血液の鑛物は骨となり蛋白質は筋肉を作り、常に代謝し老廢物を排出し

生體の組織に分解作用を爲して血液の白血球は細菌を撲滅する力を有す。

若し宗教眼にて見れば此の生理的の生體も如來藏の生物現にして種々の巧妙なる組織を機能として法身の妙用と能力が種々の因縁より成したるものなり。

呼吸と姿色

呼吸なるものは人の生活機能に缺くべからざる作用にて呼吸と循環とは親しき因縁を有てをる。呼吸は空氣中の酸素等の養分を肺に吸収して血液に供給して體温を發し老廢物を排除し、酸素を吸つて乳糜と化して血液を造る。呼吸は胸と腹との間なる横隔膜の運動にて起す。腹皮は柔かなる筋膜と皮膚なれば伸縮が自在にて胸と腹との中間なる横隔膜は穹狀にて筋肉縮めば膜は下り弛む時は上る故に膜が下れば胸廓及び肺は廣くなり腹は狭くなる故に自然上腹は前に出で胃腸が上より壓せられる。深呼吸に依て下腹が太くなる之を氣海丹田と云ふ。

また口稱念佛にて下腹に力を込めて聲を丹田より發する時は深呼吸と同じく自然と氣海丹力に力づ

く。而して能く高聲に稱名すれば其聲が清朗として宗教的に云はゞ一々の呼吸の器械は是如來の靈的器具にして酸素等の氣は悉く我等が靈を養ふ賜である

飛錫禪師が人は木れん子の珠數を以て稱名の數を採る、我は一々の呼吸の息を以て念珠とすと。實に啻に一呼一吸の息は念珠たるのみにあらず此呼吸の息氣悉く彌陀の賜にして而も靈を養ふべき糧なり。

また眞に光明に接せざる人は精神に醸しつ々ある地獄餓鬼の氣が一呼一吸の中に惡道に通ひつ々あり。此一呼一吸彌陀の靈の靈素を含みて此呼氣は天地を清め法界を淨くす。夫と反對に諸の不善の輩が胸に不善の毒素を溢して吐き出す氣息には毒素を含むが故に常に空氣を汚濁す。

姿色と分泌

人の身體生理機體及び血液循環呼吸及びすべての調節作用も皆宗教的生活には一も缺くべからざる必要條件なると共に、皆生理機能全部を靈的に應用すべきが宗教生活の旨と爲す處、生活全部が靈的

に活用する故に、人生は永遠の生命あり、眞の價値あり。生活機能を悪用する故に人格に三惡道の結果を爲す。

身體五臟六腑及び一切生理機能の各部を養ふ血液の循環に就きては既に述べたり。生體の組織器官細胞の間を循環する血液中に一種特殊的の化學的成分の分泌物が有つて、此の分泌物が化學作用に依つて非常な影響を生理機能に及ぼす力をもつて居る。一切の器官の働きが相互に因縁して互に連絡し、而して全體の生理機能の統一と調和を保たせる特殊の成分ホルモンと呼ぶ内分泌物あり。之はギリシヤ語の喚び覺(きこ)しと云ふものにて、特殊的の腺にて生成せらる。外に大多數の腺が其の分泌物を導官に依て汗などの如くに體の外に輸出すると異り、ホルモンは別に導官を具せず分泌物を直ちに體の内面なる血液中に輸出する内分泌物である。

人體は數多の器官機體が無數の細胞無數の組織から成立つてをる。之を統一する生活の目的は自己保存とか種族保存。それが更に進んで云はゞ靈的に永遠の生命と靈的に人格完成し、獨り然るのみならず、一切と共に靈的の完成を期するにあり。

實に巧妙なる機能が相聚つて組織する統一と調和とを保つ爲めには、随つて精妙なる働がなくては

ならぬ。全體統一中の各一部に於て其の變化に應じて調和せしむる働きは是れ神経系とホルモンとである。神経系は中樞と末梢とに依て成り立つてをる。高等なる人類には神経系の發達することは非常である。然れどもそのみにては完全に調節が取れぬ。また活力がない。此を助力する内分泌の助に依らねばならぬ。神経は機能が極めて鋭敏なれども疲れ易い。ホルモンは血液中の化学成分液にて化學作用を以て組織器官の興奮を喚發する力は疲勞なしに持續す。ホルモンが生理機能に及ぼす働きの二三を擧ぐれば甲狀腺、大脳下垂、副腎、又松果腺等の各處にホルモンを生成する處あり。

ホルモンと精神との關係

内分泌物が精神に關係を及ぼすことに就きて云はゞ、若し甲狀腺（俗にノドボトケ）を治療手術等の爲めに截り除く時は、精神の作用甚しく鈍くなり、記憶力減少し優柔不斷に元氣も銷沈し性慾減退し甚しきは白痴となるあり。若し之にホルモンを生成する様にしそが増す時は精神の働きが活潑となる。甲狀腺のホルモンが過度に増す時は精神も活潑に勇氣も増進し饒舌となり性慾も増長すと。

斯く甲状腺のホルモンが増すと、人の精神力と習慣と云ふものは、大に生活力の方向を轉換せしむ。故に平生に精神を靈的の高等なる方面に向けてます。使用の習慣を爲す時は活潑なる精神力を用ひゆくこと、喩へば釋尊の青壯年時代に、非常なる精神力を、大菩提てふ我無上道の光を得て一切を斯光明の下に度せんとの志願は、甲状腺の盛なる分泌物を高等なる靈的の方面に注げるを以て、大に精神活動の膏として精神の運轉を速度にしたり。

青年に漲る色慾あり、是あたは是青年の血を動物的に働かしむ。之が方向を阿耨菩提と云ふ道心を發して此の方向に向つて活動せしめば、動物慾の旺盛なる力を高等なる方面に進むべき力と爲り得ると。有爲なる青年は能く精神の膏なるホルモンを豊富にして高等なる意志の寶輪に膏さして靈的に向上すべし。

副甲状腺に一個の分泌腺あり、針頭大なれども貴重なる職を有つてをる。若し之を除く時は瘰癧症を發し死に至るあり。また此の場所が病的状態となれば精神にも影響し或は憤怒とか恐怖又不安の状を現す。また往々に精神異状を來すあり。ホルモンが精神作用に及ぼす因縁は多大である。

また精神が内的ホルモンに及ぼす力も大である。精神作用はかく血中のアドレナリンの分量に變化

を來す。すべて精神の働きが神經に傳ひ神經から血中の分泌液を起してアドレナリンなる分泌が全身の交感神經系に於て働き其働きを亢進せしむる力をもつてをる。精神作用からアドレナリンは副腎にて造られ而して血中に在つて全身を運行し、交感神經系を不斷に刺戟し全身の官能に及ばす。

教組の諸根悅豫姿色清淨なるは爰にあり。教祖は大靈なる無限の靈的太陽の靈活の力と三昧の交感し、活々したる靈氣は之を承けし釋尊の精神に交感し、靈氣は佛陀全身の交感神經に感電し、全身に運用して不斷に靈活する働きが即ち佛陀の姿色清淨と現せしなり。我等常に教祖に習ひて此の靈的電力を精神に傳通して、全身の交感神經を働かして諸根悅豫姿色清淨とならん。

緊張と弛緩

精神が生理器械に及ぼす力に一方は生理的に諸根悅豫し姿色活々となる。弛緩の一方には其の反對の括約、抑制、緊張等の統制的威力的作用あり。諸根悅豫は前者にして光顔巍巍は後者に屬す。前者は感情等を寛大にする歡喜悅豫の方、後者は意志的に統一緊張する力をもつてをる。

神経系統中に交感神経系と副交感神経系とは相拮抗して弛緩と緊張の働をもつてをる。人は植物的と動物的の兩生理機能をもつてをる。消化、呼吸、血行、排泄、生殖等の不随意の機能と随意運動の機能とである。随意筋感覺機官は精神機官にて脳髓神経の配下に屬するものは動物機能にて、腸胃血管、子宮、膀胱等の不随意筋に屬するもの之を植物機能と云ひ、腦脊髓より自律神経系となつてをる。即ち脊髓の一部より出て神経纖維が全身に瀰蔓して交感神経節の末梢と爲つてをる。腦脊髓神経は腦髓及び脊髓より起り交感神経節に關らず直接に骨格、筋及び感覺器官の末梢に連絡してをる。

自律神経系の三區。一、中腦及び延髓。二、脊髓大部分胸髓及腰髓。三、脊髓下端薦骨部。中に於て胸腰部は組織の排列に生理上機能特色をもつてをる、之を交感神経系とす。他の二を副交感神経系と云ふ。交感神経は全身に亘りて區域が廣い。眼の瞳孔を擴大にし心臓には筋肉の搏動を亢進せしめ、皮膚の全部腹部の内臓等すべての血管壁の平滑筋を緊縮せしめて血壓を加減す。毛根筋が收縮すれば毛が彌堅（いやたち）、また胃腸等の消化管の平滑筋を弛緩せしむ。また子宮、喇叭管、陰等や輸精管等の内部また生殖器の平滑筋の緊縮を起したり、また涙腺、唾腺、脾臓、腎、副腎等の分泌を促す。また若し交感神経が過度に興奮する時は肝臓等の糖原質を葡萄糖に變化し、血中に容るる爲に作

用を亢進す。交感神経系は神経節の間の連絡を能くして全身に蔓つて働いてをる。

副交感神経は自律神経系の一部として、平滑筋及び腺細胞の働きを助けて交感神経と相拮抗して働いてをる。頭蓋部の眼に在つて、瞳孔括約筋を緊縮し、心臓には筋肉の働きを抑制し、唾腺には分泌を促し、また胃液脾臓等の分泌を促し、腸胃の平滑筋を緊張する等、すべて交感神経と相反對して相互に相扶け合ひ一方は緊張すれば一面が弛緩す。交感神経系は眼瞳を大きくし、血行を盛にし、筋を興奮し腸胃の運動を抑制し、腦肺心臓の血管を擴大にし、他部の血管を收縮せしめて、身體活動に必要な器官に血量を増さしめ、或は血液を筋力の根源とし貴重なる葡萄糖を豊富にして、異化的破壊的現勢力的なるに反し、副交感神経系は諸の器官を休息せしめ將さに働くべき潛勢力を養ひ、また心臓の運動を抑制し、腸胃の運動を盛にし、消化液の分泌を促し、營養吸收を増し、すべて同化的建設的である。薦骨部も同じく、交感神経系と相待して腸の下部結腸の平滑筋の收縮膀胱壁の平滑筋利尿筋を收縮し尿道筋を弛緩し外陰部血管の擴張を以て勃起を促す。副交感神経系の薦骨部は尿糞射精等の機能を掌り、此部の作用が精神との關係は著く、激しき感情に脱糞をなし、また或感情に依りて外陰部に變狀を起す如き。

分泌液と精神

斯身心は悉く如來藏隨緣の現れたる個體なれば、小なりと雖も是全體の縮小なり。生理的の機能至れり。生理一切は皆眞如隨緣の個體、人の身と心の關係も親密なり。

人の大脳と小腦の間の松果腺の分泌液は人の生理的の早熟を防禦する能力ありて、若し早熟を防ぐべき分泌液を作る松果腺の腫物に胃され若しくは障礙あれば、心身共に早熟し、幼少にして身は長大し鬚髮生じ生殖腺及び外陰早發す。小兒にして長者の如くの智慧辯論をなす如きあり。また性慾強く手淫の病的に陥るあり。此の分泌液は生理的の早熟を防ぎ年齢進むに隨つて分泌減退して徐々として身心を發達せしむ。雛鳥の松果腺を手術にて除く時は雄雞の雞冠蹴爪等も發達し早くに交尾を挑むやうになると。大脳下垂體の指頭大なる處の分泌液の處を取除く時は、身體及び骨格の發達が妨害を受け、生殖器の發達が不完全となり、精液も造られず、雌性ならば妊娠せず、性慾も減退す。之と反して下垂體肥大なれば、分泌液盛なれば骨格も發達し身體も長大に、若し成人の後に發達せば指頭鼻尖

及び舌手足等のすべて突出せる部分が不釣合に生成肥大する如き、すべて身心の發育を催ふす働きをもつてをる如しと。松果腺と大脳下垂體との内分泌の働きは相待にして調和と統一を司る。

やはり諸根悅豫と威顔巍々との相互に相助長し相抑制して調和と統一を完全にす。精神が習慣生理に及ぼす力大なり。常に信念を堅固にして生理の根本なる靈力を仰ぐ時はすべて生理機能の適宜を得て身心調和宜きを得て諸根悅豫と威力巍々たるを得ん。

又宗教は古來高德は能く性慾を防遏して精力を高尙なる道心に發動せられたり。此性慾は本より生理上必須の性なり。然れども其の身に素づきて禁慾家は禁慾について其の防壓するの理を識るべく、節慾家は節慾につきて理を知るべし。性慾本ミオヤが人生に賦與せしなり。生殖腺の内分泌性慾に及ぼす關係に就て生理學に曰く、若し生殖腺の病的より大脳を冒し精神に障礙を來したり、また生殖作用の變化を起す故に、春期發動期には身體にも精神上も革新を爲す。此期に於て精神病を發する如き偶然にあらず。或る學者の實驗に、蛙の交尾期に入りて性慾旺盛と爲ることは抱擁反射と爲りて外に表はる。即ち雄が雌を抱く如き此は一定の神經中樞の興奮によりて反射的に喚びおこす。中樞の興奮は平生は大脳より來るなれども抑制機能に之を抑制せられて居る。然るに交尾期に入ると大脳の抑制

機能が減退して而して抱擁反射の中樞が興奮してこの働きを起す。此また生殖腺内分泌の作用に本づく。假令交尾期に入るも雄蛙の睪丸を除く時は性慾減退し抱擁反射を起すことなし。要するに生殖腺の内分泌は神経中樞の性慾に關する働きをもつて居る。

分泌液は人の身體の五臟六腑及びすべてに沁み渡りて涸々たる生命の流を潤し活氣を催して居る。若し此の分泌液が涸渴する時は生命は渴してしまふ。

精神と食物

人の姿色清淨ならむには生理機能に於て消化作用の胃の分泌は大事である。此の胃液の分泌は精神作用と深き關係をもつてをる。胃液分泌の中樞は延髓にて、食物の刺激から感覺器官を興奮して食慾の精神作用を起し、大腦より胃液中樞の延髓に於て分泌物より食慾を起す。胃液の分泌物は二つの時期に行はる。第一期に食物を攝取すれば胃に達せざるに起る分泌物と、食物の胃に入つて二三時間持續する胃液の分泌物。食物は一部の胃液にて消化し、カストリンなる内分泌物が胃の幽門部に於て形

成せられる。之が吸収を受けて血行に連つて胃底部の粘膜に。

精神に關係あることは嗜好物には胃液分泌の中樞を興奮して食慾を起して分泌物が多量に出づ。若し食物を思はぬ時は胃液分泌が行はれぬ。假令食物なくとも嗜好物を想像すれば盛に分泌物が出づ。之に反して非常な苦悶憤怒杯の激しき情緒の動く時は分泌止む。精神作用は一切の生理機能に及ぼす腸胃の働きに關する。非常な憤怒又は憂愁等の感情を激したる時は胃の運動障礙を起し又消化液の分泌を妨げ、爲に消化不良となる。

常に大なるミオヤに精神快活なる時は食慾もすゝむ。

姿色と交感神経系の内分泌

生理は人に有利に賦せられたり。

調節作用の内分泌、副腎より起るアドレナリンなる物は、交感神経繊維の平滑筋に在つて交感神経系を興奮させる力を有つてをる。若し試に少量のアドレナリンを血管内に注射すれば瞳孔散大し、涙

腺より涙が分泌し全身毛逆立ち皮膚及び内臓の血管は收縮し腹部内臓の血管は收縮すと。此のアドレナリン分泌物は副腎にて製造する故に、若し副腎の病氣に罹る時は筋力が減弱すと。

アドレナリンは葡萄糖を造つて、生理上恐怖とか苦痛とかの感情の働きを柔かに忍び易きやうに有利にできてをる。アドレナリンは肝臓より糖原質の多量を葡萄糖に變ぜしめて、血中に入る時は苦痛や恐怖の感情の働きに要する筋肉の働きを有利にす。其の所以は葡萄糖は筋力の根源である故筋力を養ふ糖分が必要なり。アドレナリンの働にて交感神経の配下なる腹部臓器の血管烈しく收縮する。其かはり交感神経に關せざる四肢筋肉や脳髓または肺心臓等の血管はアドレナリンの爲に收縮せぬ。

故にアドレナリンは、血壓は自ら腹部内臓に高まり脳や心臓等は血壓が低くなる。そこで血壓が高きより低きに向つて循る爲に、脳や心臓などが多量の血液が供せられて、神経中樞循環呼吸系等の供給と老廢物の排除を良好にして身體の活動を盛になす働きを有てをる。内分泌と呼吸との關係は副腎の分泌物アドレナリンが呼吸に及ぼす働きはまた大なり。元來身體の活動を烈しくすれば、隨つて酸化の度を増す爲に、呼吸が多量の酸素を吸入すると共に炭素を排除することも多量となる爲に、呼吸の働きが盛に行はる。

生理の不快感軽減

ミオヤは人に生理的に利を與ふべく賦し給へり。

故に若し不快感の原因たる刺激が腦に起ると、腦の血管は収縮する爲に、腦の神経細胞の興奮性が衰へしめ、不快を感じずる感覺力を鈍らす故に感覺が軽減す。故に何か心配不快を感じずる刺激を受けたならば腦の神経の興奮性は衰へるやうに、下腹丹田または脚部に力を注ぐ時は、自然と不快感の情が軽くなる。心配の刺激を受けた折に、腹部内臓の擴張する時は、脳及び皮膚等の血管が収縮して、爲に知覺神経が鈍り、不快の感を軽くすと。快不快等の腦の神経の働く時は、血液は多量に成る故に、益々快とか不快の感覺を鋭くす。故に快感には他を忘れて充分に腦に血液を働かすべきに任ずも、不快の感は成るべく血量を腦より他に輸出する様に心を用ゆる時は憂惱恐怖等の感情が軽減す。

精神統一生理は三昧を有利にす

此身心は宗教的の器具である。宗教は人間以上の絶對的實在者との親密なる關係を結ばんとするに成り立つ。若し三昧冥想中に、神（ところ）を神の方に集注する時は、腦髓及び内臓の血管は擴張す。之に反して外部及び四肢の血管が収縮するにつき、理由は他部の血液を奪つて腦に集め、腦の生理機能を進せしめ、精神の作用を有利ならしむる爲めばかりでなく、ウエルヘルの説に由れば、腦髓及び内臓等に血液を聚むる時は、皮膚は貧血を起し、すべての知覺神經を減退し、外來の刺激の感覺を鈍らし、精神の統一集注に有利ならしむ。若しかやうな目的とすれば、内臓血管の擴張によりて、他の表部を貧血ならしめ、腦髓血管の擴張によりて腦の血行を良くし、又一方に他の血行を貧弱にして感覺を鈍らし、一ら精神を一境に集注せしむるに有利にし、三昧の境に入りて神（ところ）を一に追遙するに順應にす。宗教的の人類とすれば是神人感應に適するやう生理は出來てをる。

三昧統一

人の意識は種々の雑念亂起して同一觀念を把住すること容易に非ず。

世尊の光顏巍巍として威神犯すべからざるは、内面三昧統一的の心意の表現なり。然るに精神的意力の弱き衆生は此意識を統一することは容易にあらず。生理的機能、腦髓機能は常恒不斷に活動して、血液が腦髓機關中に循環し、最も激しき活動が統一に秩序的活動するは、最も健全なるか、天才的なるか、また能く堅忍不拔の精神を以て練習の結果なるとあり。人の意識は種々の雑念亂起して一定時間同一觀念を把住することは容易にあらず。意馬心猿外塵に惹起せられ、内心に劇波甚だ停め難し。種々雑多なる歴縁對境に襲はれたる習慣の惰力甚だ除き難し、紛紛たる雜慮紛起しまたは想像記憶等の覺念が繁く往來す。

三昧修行の要は妄念雜起を驅除して純一無雜の思念を精練する處にあり。即ち明鏡を執つて無想無念の境に安定するの心の相なり。心を一境に住して目的なる如來の靈境に安住し、自己の妄念亡じた

る處に如來は現前す。若しそれ如來の靈月を感じんとせば自己の心水を坦然と靜にすべし。

三 三昧 練 習

三昧修行には意思の精練を要す。精神の力は意志にあり。意志の力強ければ感情及びすべての念慮を抑制す。諸の妄念起らば、此に關せず唯目的の方面に專注し。心々相續して勇猛精進なる時は、益種々の感情活動或は劇しく熾然かと思へば忽に消ゆ。故に之を防禦する豫防法としては、成るべく感情を惹起すべき原因を遠ざけて、一定の撰擇せる目的に向つて欲欣の心を生ぜしむべし。他の雜念を排除するは意志の力なり。念佛三昧は雜多の念慮を排して専ら如來の一境に住む。其の純正なる目的は如來を知見し如來心中に入り光明獲得する處にあり。

三昧は自己のすべての善惡の念を止め、自己を空虚にし、意識を滅却して純一なる如來心に入るなり。意識滅却すると云ふも從來の妄我を滅却し、而して如來の靈に満たしめ靈に活きんが爲めなり。若し如來の靈に満たさるる時は靈的活氣全身に彌漫すべし

住神一境

念佛三昧は單なる觀念に非ず。所念の如來を純一專注し、心念統一の意志、所念の彌陀を專念し、目的を遂行せんとの心念なり。漸々純熟するに隨つて、精練せる心念は白日青天、一點の片雲なく、靈日麗天、靈妙の活動、自己精神生命全く如來に投じ如來我にあり我如來中にあり。

古人が、月や我や月やとわかぬまで心に澄める秋の夜の月、とは此三昧の心理の消息を洩せしなり。

清淨光の感覺靈化

如來の清淨光を人の感覺に受けて靈化するに五種あり。我々の精神状態が一心に如來の光明を受けますと、肉の眼も耳も鼻も舌も身も何となく變つて清淨になります。

それがもつと進みますと、天眼、天耳、天鼻、天舌、天身清淨と能く申します。千里眼で遠方の物がわかると云いますが。それが天眼であります。

尙進むと、法眼、法耳、法鼻、法舌、法身清淨と申します。肉眼と天眼とはは形の世界を見るので、生理的眼で見るのが肉眼であります。千里眼見たやうに精神に通して世界のもが見える聞えると云うのが天眼天耳と申します。それは清淨になるからであります。もつと進んで、如來の世界極樂と云ふのは此世界ではありませぬ。佛の世界神の世界は自己には見えませぬが、法眼清淨になると見えます。何とも云はれぬ音楽の聲が聞える。

慧眼と云ふのは、天地悉く何もなく、宇宙と○合してしまふ。

それから佛眼になるのであります。それが出来ますと釋迦さんと同じような状態になるのであります。

皆さんが始終心を其方に用いて行きますと、理性だけでもできてきます。其中に樂が感じられます。如來の境涯と自分の境涯とが見つかつてきます。心の日ぐらしが高等になつてきます。何しても人間は賤ましくなるものでありますが開發して行きますと理性も高等になつてきます。感覺が美化してきます。そうなると何ものでも清らかに感じられます。青い眼鏡で見ますと何を見ても青く見えますように、自分の心が賤ましいと何を見ても汚く見えます。それが清淨化してくると清らかに感ぜられるようになります。

人間は人間だけを見てゐるので、自分の心の一部でも心が清淨になれば何ものでも清らかに見えてきます。人間には人間の事がわかりませぬ。自分の心が清淨化してきますと、何となく美しく感じ樂く清らかに感じられます。

五 眼

如來は如來一切靈力より本覺如來の性徳恒沙の實相より顯現し給ひて衆生を誘引せん爲に十劫正覺の唱ひを示せしかども、實は無始より已來本覺の法身と齊しく常恒に十方法界に周徧して淨土ならざるはなし。しかるに衆生何故ぞ如來の清淨國土の中に在て衆生は穢惡充滿の忍土を感ず。衆生濁惡不善の世界の中に在て諸佛聖者は常寂光の極樂を觀ず。

吾人が生息する處の現宇宙を超えて遠き彼岸に到りて初めて如來及び淨土を求むることなかれ。經に云く「アミダ佛去此不遠」。淨業成ぜん者こゝに在て即ち瑠璃寶地に安住することを得べし。牆を隔てずして七重行樹は眺むることを得む。

萬徳の佛身は心眼開く處に現はれ、光明赫耀の淨利は淨業成ずる處に感ぜん。

佛陀は心眼未だ曾て開けざる衆生の爲に暫らく萬徳莊嚴の淨土を十萬億土の彼岸に在りと説けるも、法眼を開かしむる法を示してアミダ佛去此不遠(近)と云う。是の如きの理由は能見の眼に種々

あることを知らざるべからず。

能感の心機種々あるが故に所感の淨穢自ら不同あるの眞理を明らむべし。能感の機能種々あり、五眼。

五眼とは肉と天と法と慧と佛眼となり。初め肉眼とは即ち吾人が人類として自然に規定せられたる機能官能の眼官なり。こは解剖學また生理學に於て物理的に研究すべき器械的なり。この器械的官能は器械的に自然現象界を感見するものなり。この機械官能の功用は物理的にして恰も眼鏡に前境の物を映寫すると同じなり。さてここに於て此器械的の肉眼なるものなかりせば日光の明輝なるを感覺せず、天火もまた炳なりと見ざらん。盲者は太陽の光明を見ざるも日光それなからんや。之と同じく人肉眼のみありて已上の四眼の境界に於ては吾人は盲者の謗は免るべからず。吾人は淨土に更生する人に對せば不具根缺の人といはざるべからず。

肉眼已上の四眼とは天眼法眼慧眼佛眼。これを前の肉眼と合して五眼と名づくなり。

天眼とはいかなる感能の用をなすぞとならば、天眼とは天は天然即ち自然の理法なり、若し人の心意が外界の爲に動かされず、天仙の如くに從容として自然と同化し没しぬれば、自己の精神と自然界

とは本來同一體の物にしあれば、自らら神通感應して自然界中に現象せるものは神通して自己の心眼に感交し來る。

かの六通を得たる羅漢がここに在て座禪の床に坐して世界中の千萬里の彼處の出來事を感じするが如き。かの天眼の一端とも云べき催眠術によりて見るも、身は東京に在て西京の事物を見るが如き是なり。斯術に於ても其修練の程度熟達の成不あり、若し能く熟達して全く自然と一致し同化したらんには、自然界の一切の現象は掌中の珍果を見るが如しと。經中の文焉ぞ夫れ怪むに足らん。しからば經に天眼をもて千萬里の彼處の細塵を見ること掌中のアンマラ果を見るが如しと。

主體の方は器械的の肉眼にあらざして即ち自然と一致したる心眼にして、客體の方は自然界の現象せる一切の色相を見るを天眼と云ふ。

次に慧眼とは智慧の眼と云ふことにして、これはやはり心眼にて其對象となるものは自然現象界にあらず即ち觀念界である。視よ吾人が肉眼は器械的にして外界に望む時、其距離が益々遠大なるに及んでついに感覺盡て之を明瞭に見ること能はざるに至る。然るに肉眼に藉らずして吾人が自から觀念をもつて宇宙の大を感じる時は、宇宙は渾然として一體、彌々心力を盡して觀する時は、一大觀念態は

法界に周徧し遽然として一切の萬象の影は沈没して現ぜず、混濛浩汗として大海に望むが如く、肉眼に幻現し來れる天體の無邊も悉く隠没して宇宙無限と一體觀となり、能觀の心と所觀の界とは○然として一致し、能觀の慧が法界に周徧しその對象となるべきもの一塵の影だにあるなし。かゝる觀慧を慧眼と名づく。

次に法眼とはいかなる境界を感じするぞとならば、先に説明したる慧眼は一大觀念態にして萬象の影もなくただ一大圓相の如く元來無一物の體なり。法眼の對象はその慧眼の一大觀念界中に顯現する處の靈的感覺なり。この對象を觀所成色と云う如き、斯聖典に示せる處の衆寶莊嚴淨土の靈象六十萬億八萬の相好身等は全く法眼所照の境界にして肉眼の對象たる感覺界に求むべからず。

若し人法眼を開き來て觀ずる時は處として衆寶莊嚴の淨土ならざるはなく如來の相好光明遍滿せざるなし。斯る萬物が光明光輝を放ちつゝある淨土の中に在りながら、法眼未だ曾て開かざる衆生は美を盡し妙を極めたる美天國の莊嚴は觀ること能はざるなり。喩へば麗日輝きををさめんとする入り日の夕の光景を肉眼なき人は之を見る能はざると同じく、吾人は肉眼の失ひる者に對してこの光景を見えざるを嘲けるも吾人は未だ法眼なくして美天國を觀ずること能はざるなり。然らばいかゞして法眼

を開きて淨土の莊嚴を觀ずることを得べきとならば。

法眼は淨業成就の眼なれば是自然の生得にあらず。二種法身の中に就て法性法身は慧眼をもて觀ずべく、方便法身は法眼をもて之を觀ずべき對象なりとす。

次に佛眼とは佛陀が萬善の修行の結果として本覺の體相用と一致したる處に成就したる心眼にして、佛眼は前の法眼と慧眼とを統一綜合せるものにて、法慧の二眼は本より心眼にして其體は同一なれども、其對象が甲は觀念界の差別の心象を見、乙は無差別の實相を觀ず。之を統一せるものが佛眼にてあれば、佛眼をもて觀ずる時は、宇宙一大觀念界の大圓鏡に重々無盡の莊嚴法界ありて存す。

佛陀は五眼圓かに、明かに自然界と睿智界とを双照し、慧眼の無相界と法眼の高等感覺界とを併觀する大自由を得給へり。

ここに於て理感二性の宗教に、理性宗はすべて感性を排除し先天的の觀念のみを重んじて、感性と云はば自然のみにあらず高等なる感覺靈象の淨土の莊嚴までを否定せんとし、感性宗は感性と曰はゞ宇宙大圓慧界の靈的現象なるを知らず、幼稚なる天然教と超自然教と併合せる如き衆寶莊嚴の天國は自然界を超えたる彼岸に自然界のと同じき物質的の感覺界の淨土實在せりと謂（おも）へり。

若し大乘佛教の圓滿なる修多羅が教ゆる處に依て實修實行し、佛陀所證の極樂涅槃界を唯客觀の自然界に求めず、全く主觀的に實修し法眼已上の三眼開目し來て觀する時は、此(こゝ)を去らずしてアミダ佛衆寶莊嚴の淨土を見ることを得べし。

五眼明了に開き來て始めて圓滿なる佛教を信ずることを得べし。或る一流の理性宗が偏執する如き佛界は唯偏空的の涅槃界に墮すべきでなく、また凡夫が執する如き唯自然の實在を實在と執する虞なかるべし。

美天國は自然界の有頂天九蒼の空に求むべきにあらず。全く自然界の蒼天に地位を占むるものに非す。

清淨莊嚴の國土則ち美天國は幼稚なる自然的實在に非す。即ち極樂は吾人が衣食せる如きの物質的實在に非ず。即ち全く彼土の宮殿は金銀ルリ寶石をもて全く工巧が人工を以て造營構成せし宮殿樓閣に非ず七寶の樹は本より園丁の栽培より成立せるものに非ず。衣服の莊嚴の具も裁縫構築浣濯を要すべきものにあらず、皆自然應法の妙服とす。また食物にしても七寶の盃器自然に前に在り、金銀などのもろもろの盃はその思のまにまに其處に顯はれ、百味の飲食は自然に盈滿すといへども、實に食す

るものなく唯色を見香を聞きて意に食せりとおもへば自然に飽足す。またこの清き國土は安穩にして微妙なる快樂あり。本より彼處は無爲涅槃の靈界にましますば、もろくの聖者は智慧高明にして神通洞達し感同じく一類にして其かたち異狀あることなく、天人とは名にこそ云ならめ、其實には清淨法身はさながら虚無の身無極の體。衆の物質元素より化合せられたる細胞の聚合物に非ず。されば觀經また無量壽經に詳かに讚し給ひしかの莊嚴淨土の光景は本より自然物質の成立したるものにあらず

清 淨 光

感覺とは普通は視覺聽覺嗅覺味覺觸覺の感覺作用にて、精神が外界との關係には最先驅にして、すべての心の作用は感覺の關係よる發るべきものなり。然るに天然教には全く天然の感覺界に客體を投映し神は物質界の中に有りとし、或は太陽を神としまたは天然一體の如きは宇宙の無限なるを神の國とするが故に感覺界に神は實在すと質朴なる宗教意識なり。

儒教には上天の載は聲も無し臭もなし至れる哉とは感覺の極にして超感覺に進まんと欲する兆あるも未だ超越する能はず。超然主義には此感覺世界を超越して命終りて彼岸に到達して、又微妙にして清淨莊嚴の感覺世界即ち七寶莊嚴の淨土また美天國彼岸に在りとす。

圓具教には、客體の關係に、主體の心機に感覺性に感ずべきものは天然の感覺。主體の感性即ち心機が宗教的精神開展の上に超天然の感性となり來りし後の客體の關係の心機の現象界なり。(清淨なる感覺世界の説は已に形而上の無碍光の中に於て已に論じぬ) 今は正しく宗教關係の圓滿に開展し

たる心理現象にして、知力の佛知感覺の顯現は、初め佛知見啓示として先づ感じ來るは感覺態なり。或は光明相現じ來るあり或は瑠璃寶地等の妙色莊嚴顯現す。(具には智慧光の下に於て説明せん。)

啓示としては、精神に感發し益々進化して 能く精練せる機能は純熟して感覺機能が極めて精妙に瑩然として、喩へばよく璞を琢磨して垢質去るときは内外に映徹するが如く、宗教機能の最精妙に修練せるときは洞然として十方に交徹し靈明にして不可思議、斯の如きの心機は内外に映徹して光り表裏に究暢せるが如し。此機能に超感覺の妙境顯現す。啓示により顯現したるも已に久しくして精練する時は、感性の精妙に熟するもの如し。故に能く精練し成熟したる機能は必ず感性に證明すべし。感覺機能精明にして天然の人に超えたり。

法華法師功德品に六根清淨の機能を明かせり。即ち肉眼清淨にして障外を見せしむ。眼に八百の功德あり。又千二百の勝利を得以て遠音を聽かしむ。鼻根清淨にして云々。

父母所生清淨肉眼世界内外を映徹して見る。又因縁果報の生處を悉く見る。又清淨の耳根をもて世界内外の種々の音聲を聽くに皆悉く種々の音聲を分別して聰慧にして能く聞知すと。次に八百の鼻の功德をもて是の清淨の鼻根もて世界内外の種々の諸香を嗅ぐ。

父母所生の肉眼に五眼の用を具す。世界の内外無碍に見るは天眼の用なり。衆生の因縁を見るは法眼の用なり。其眼甚だ清淨なるは慧眼の用なり。一時に内外感覺と觀念世界とを見るは佛眼なり。

耳根清淨世界内外を聞く感覺界の音を聽くは肉耳なり。觀念界の偏空を聽くは二乗の慧耳なり。觀念感覺兩方面を聽くは法耳なり。絶對圓滿を聽くは佛耳なり。また聽きて著せざるは即ち慧耳なり。謬らざるは即ち法耳なり。一時に聽くは佛耳なり。眼根亦然り感覺人界を見るは肉眼、二乗を見るは慧眼、菩薩を見るは是法眼、佛を見るは是佛眼。父母所生は肉鼻。世界内外を嗅ぐは天鼻。不染不著なるは即ち慧鼻。分別するに謬らざるは即ち法鼻なり。一時に互に用ゆるは即ち佛鼻なり。舌根清淨にして一切の美若くは不美諸の苦澁の物も其舌根に在らば皆變じて上味と成りて天の甘露の如くならん。又舌根清淨にして深妙の音聲を出して聞く者をして歡喜せしめん父母所生は是肉舌、諸の語をなすは天舌。壞せざるは慧舌。謬らざるは法舌。一時に互用は佛舌。苦澁惡味は舌に觸るれば悉く變じて上味と成るが如く、衆色眼に觸れば妙色と變ず。一切の色は佛色と同じく、一切の聲は佛聲と等しく皆清淨なり。身根清淨にして淨瑠璃の如く、衆生見んことを樂ふ世界内外悉く中に於て現前す。世界の所有の中に於て現ずるは肉身の用なり。二乗身中に現ずるは慧身の用なり。菩薩中に於て現ず

るは法身の用なり。佛身の中に現ずるは佛身の用なり。一時に圓現し一時に互用す。一時に謬ることなく一時に著するなく、心の實相を證する、四大皆空にして淨瑠璃の如くに障礙なく、森羅萬象現前せずと云ふことなし。意根清淨にして一偈一句を聞くも無量の義に通達し其所説の法其義趣に隨つて皆實相と相應す。皆俗間經書世語言資生の業等を説かんに皆正法に順ず。是人思惟籌量言説皆是佛法にして眞實ならざるはなし。

世間の資生産業皆正法に順ずるは意淨なり。實相と違背せざるは即ち慧意淨なり。思惟籌量皆佛法なるは佛意清淨なり。一時に圓明に一時に互用、一時に染なく一時に謬りなし。

人の天然の感覺性は喩へば金の鐵中に在るが如し。また眞珠寶の鐵垢の中に在るが如く、精練純熟する時は、淨摩尼輪の寶瓶に容るに交徹映飾にして十方に照耀せるが如く、心洞然として徹照すること無量なり。或は空間として淨瑠璃輪の如くにして玲瓏とし燦然として榮色極りなきに至らん。

感性清澄の故に、眼識清淨の故に眼界清淨なり。耳根清朗にして耳界清淨なり、或は微妙の樂音を聽き、また音聲清朗にして常の人に超えたり。身根清淨の故に身常に輕安にして體肝かなり。

此の如きの感覺的清淨微妙の境界は天然の人の窺ひ識る處に非ず。

宗教客體との關係に、感覺の妙色莊嚴界、是客體の妙色莊嚴なりや、將た主體の心機感性の精練によりてしかりやとの問題には斯の如くに答ふるをえん。已に形而上論に論じたるが如く、超天然教として進化し發達したる宗教意識には、元より客體との關係は天然の感覺世界に求めざるは論をまたず、精神的宗教の客體は、絶對精神態として、此本質内容に豐穰に具徳の故に、本質至精純粹なるにも拘らず、衆生の心機極めて精練の内に、感性清淨にして、客體との關係に、微妙なる妙色莊嚴即ち感覺世界顯現するは、起信論に説くが如く、客體の本體は眞如無相第一義空諦にして施作を離れたるも、衆生の見聞によつて妙用を呈して種々の妙象莊嚴界を現す。衆生の機能を離れては如來は唯々如々如々。理智獨存のみなれば、感覺莊嚴の現すべきなし。然れども衆生即ち個人の感性に對して無盡の莊嚴を顯現すること窮盡なしと。

個人の心機益々進化發達するに隨つて所感の妙象益々廣大に進化すと。即ち識る衆生の機能に感見することを。

唯識論に一水四見の喩あり。萬法唯識の故に、即ち世界の本體は唯精神の一元理の變作の萬物なれば、所變の顯動界は同本質が之を感ずる處の衆生の心機に種々の相を呈す。本質には元來實の相有る

なく、個々の機能に随つて種々の現象をなすと。譬は水は同一質なるも人の感覺には江河の水と認むも、魚に對しては空氣態に比すべく、若し精明に純熟しをる神識の梵天の眼には瑠璃寶地の映徹せるに感ずべく、また餓鬼の業識には熱火の接近すべからざる火河を感ずとの喩の如く、全く一切は唯識の所現にして、若し心識を離るれば一切境界の相なしと。若し人にして機制心理を超越して精練せる感性には、客體の關係に七寶莊嚴の感覺世界顯現すべし。非物質的精神態の客體は自己の精神の進化によらずして物質的感覚莊嚴を求めんとせば決して得べきものに非ず。

また譬へば青眼鏡を以て外境を視る時は萬物青色ならざるなし。若し客體の關係によりて精神轉化するときは、十方法界悉く清淨國ならざるなきを感ずべし。いかに進化したる宗教意識にも、超感覺の土に勝妙なる感覺世界を建設するは理の免れざる所。人の心理には感覺作用あり、故に超天然の心理にも勝妙の感覺作用あり。こは佛智見開示の感覺啓示によりて初めて機能開展し益々抗進し發達したる感性には常に觀念世界に之を觀見するものなり。故に斯の如きの人は經驗世界觀念世界の兩方面の感覺世界を認識することを得べし。

法華に我三界の如くに三界を見ず。實に衆生は劫盡きて燒盡さるゝも我此土は安穩にして天人常に

充滿せり等云々。

然るに法華の如く、實に三界の相を知見すると云ふ文には、多種の方面を含むが如し。

牟尼の超感覺なる觀念世界の内容には、或は常寂光土として、如々の理、如々の智、獨存するを見るは是理性の智を以て見たるなり。或は華藏世界としては重々無盡の妙境を顯現す。

淨土教の如きは客體の感覺的方面を正面として、感覺的淨土の莊嚴を正面とするも、經驗的天然界の感覺に求むる如きは誤謬の甚しきものと云はざるべからず。淨教は天然教に非ず最進化したる精理教なり。故に淨土の本質は非物質精神に發見すべし。

經に、如來は是法界身なり一切衆生心中に入ると。忠師釋して、法界とは是意識が所縁の境なり。前五識の所縁は色聲香味觸にして感覺界なり。第六の意識が所縁を法界と云ふ。前五界は物質界なり。第六のみ精神界なり。五識所縁なる認識の感覺世界に如來を發見すべき理なし。如來を觀ぜんと欲せば如來及淨土の本質に適したる精神界に求めて觀念的に發見することを得べしとの義なり。曾て形而上論に論したる如く、觀經及三經共に物的淨土の文を見ず、況んや天然界に淨土を明にすべきに非ず。